

新たな歴史研究の視点にふれながら

木村直也

はじめに

私は学生時代から研究テーマを変えることなく、幕末維新期の日朝関係について、牛歩の歩みながら愚直に考察を進めてきた。その意味では、世間の研究動向の流行り廃りに左右されてきたわけではないのだが、振り返ってみれば、その時々新たな歴史研究の視点に大きく影響を受けてきたと言える。またそうした新視点は、その時代・社会の状況が背景となって生まれたものである。ここでは私の研究の歩みに沿いながら、歴史研究の新視点とその背景について振り返ってみたい。

新たな歴史研究の視点にふれながら（木村）

日朝関係の転回をめぐって

そもそも私は「征韓論」や朝鮮蔑視観の成立に興味があり、一九八〇年に卒論を書いたのだが、その少し前の一九七〇年代に世間では江戸時代の日朝関係（平和的・安定的な交隣関係）に注目が集まり始めていた。そこでは、「二千年余りにわたる日朝関係の歴史では、不幸な関係ばかりではなく、むしろ平和的な関係の方が長い」ということが強調されていた。一九六五年の日韓基本条約締結以後、少しずつ日韓交流が進み、日本の高度経済成長を追うように、一九七〇年代から韓国の経済成長（漢江の奇跡）が進みつつあった時期である。韓国・朝鮮への関心が高まり、いろいろな大学で韓国・朝鮮語の授業が開設されていった。

そうした状況で江戸時代の日朝関係、とりわけ通信使による交流が注目され、外交史・貿易史の実証的研究も進む。享保信使（一七一九年）の製述官として来日した申維翰の『海游録』が翻訳され^①、通信使について一般向けの書籍も刊行され始め、ドキュメンタリー映画も作成された。それと並行して、手堅い学術的研究も進む^②、その後も多くの研究・著作が生み出されていった。

こうした研究・出版が進めば進むほど、私としては、そうした近世江戸時代の「交隣」の関係が、近代（明治時代）になるとなぜ「征韓」に転回してしまうのか、ということにいつそう強い疑問を抱くことになった。幕末維新期の日朝関係の転回を述べた卒論「明治維新期における日朝関係の研究」（一九八〇年）を書いたことにより、対馬藩が日朝関係変革に重要な役割を果たしたことを認識し、そこに至る時期の対馬藩の動向はどうだったのかに関心が向いた。修論「幕末期の対馬藩と対朝鮮政策―文久・元治

年間を中心に」（一九八二年）では、財政窮乏に苦しむ対馬藩が朝鮮進出論を提起したことを明らかにした^④。そして一九八一年以来、長崎県立対馬歴史民俗資料館（現長崎県対馬歴史研究センター）にたびたび足を運び、同館所蔵の宗家文庫史料の検討を進めることになる。このような私の研究方向が定まった背景には、江戸時代の日朝関係を再評価する動きが影響したことは間違いない。

「鎖国」の見直しをめぐって

私が修論執筆のために東京大学史料編纂所に勤務しておられた荒野泰典さんに会いに行ったのは、一九八一年五月のことである（荒野さんはその後立教大学文学部に移られ、二〇一二年まで立教大学の教壇に立つておられた）。私はこのとき荒野さんに誘われて、前近代対外関係史研究会（対外史研）や朝鮮王朝実録講読会に参加するようになる。

さて荒野さんはすでに、一九七八年の歴史学研究会大会近世史部会において「四つの口」による幕藩制的外交体制について報告をしていたが、一九八二年には歴研大会全体会の報告を引き受けられた。その準備を支援するため、対外史研で数回にわたって研究会が開かれた。その過程で荒野さんは、「鎖国」を見直す必要性を確信し、大会報告で提起する。その新たな視角は、一九八八年の『近世日本と東アジア』の序論部分で明確化され、近世日本の対外関係は「鎖国」ではなく、海禁・華夷秩序として捉えるべきであるとされた。私は一九八七年の近世史サマーセミナー（岡山）で報告を行い、荒野説を含めた近年の近世対外関係史研究の紹介と提言をしたが、参加者らは新視点への関心を強く示していた。

新たな歴史研究の視点にふれながら（木村）

荒野さん、および同時期にロナルド・トビさんが提起した「鎖国」の見直しは、その後、研究者間で議論を伴いながらしだいに浸透し、またマスメディアでも取りあげられた。学校教科書でも「四つの口」について充実した説明がされるようになり、「鎖国」という言葉はなお現在も教科書で使われ続けているものの、「鎖国」が近世後期になってできた概念であることが明記され、また高校教科書の一部では「鎖国」を避けた表現もみられた。^⑥

では、なぜ一九八〇年代以降に「鎖国」見直しの新視点が世間の関心を集めたのだろうか。私はその理由を、おおよそ次のように整理したことがある。^⑦

①国際化（グローバル化）が進展し、一国的観点にあきたらなくなった。

②日本が経済大国となり、アジア諸国も経済発展したため、西洋（欧米）中心の世界観から解放され、東アジア世界に関心が寄せられるようになった。

③冷戦構造崩壊、民族問題深刻化の情勢下で、琉球・アイヌを自立した存在とみるようになった。

④近代を相対化するポストモダンの思潮が高まり、前近代固有の価値体系も重視され、「明るい近世」イメージが強くなった。

私自身、こうした新視点からの議論を受け、江戸時代の対馬藩の位置づけについて理解が深まっていた。すなわち、対馬藩が担った日朝関係を高く評価する研究者はそれまで、「鎖国であつたのに、対馬が豊かな交流をしていた」と説明していたが、対馬を日朝両国の媒介者とする微妙な三角関係は、幕藩体制の構造的なものであると考えるようになった。また、その三角関係に基づく江戸時代の平和的・安定的な関係は、決してバラ色の友好関係ではなく、矛盾・葛藤を含んだものであり、江戸時代はそうし

た問題を孕みつつも関係を何とか維持しようとする力がまさっていたのに、幕末にはそうではなくなることこそが、「交隣」から「征韓」への転回の本質だと考えるようになった。

なお、私は「鎖国」見直しの論議を大枠で首肯するが、近世中期に状況は変化し（かつてそれを「鎖国」的実態への接近と呼んだことがある^⑤）、幕末期には「鎖国」という言葉が使われるようになる実態も重視したいと考えている。

明治維新の新視点

私は近代史的な問題意識から入り、歴史学研究会近世史部会に所属するなどして近世史研究に触れたことで、近世・近代を通して考えるきっかけを得た。また明治維新史学会にも長年関わってきているが、近世・近代の双方をふまえて幕末維新史を考察する必要性を痛感している。

明治維新史はかつて、「勝者」の視点、かつ近代の視点から描かれることが多かった。すなわちペリ―来航以降の変動のなかで、対応能力のない幕府を倒した明治維新によって近代国家樹立の道が開かれ、アジアで最も早く近代国家をつくったとするもので、近代化論の論調もこれに符合する。あるいはマルクス主義にのっとって、被支配階級による変革として捉える発展段階論も一時期は隆盛であった。また幕末維新时期は小説・ドラマなどで人気の時代であり、後世つくられたイメージも強い。

しかし近年、西洋近代が絶対的・理想的だとは言えなくなってきた。アジアなどの経済発展に伴い、欧米諸国の影響力は相対的に低下した。また冷戦崩壊により、社会・共産主義の退潮が明らかになった。

新たな歴史研究の視点にふれながら（木村）

さらに少数民族、女性、社会的マイノリティの権利も尊重され、多様性が重視される一方で、それらへの抵抗も見られる。そうした世界情勢が、明治維新史の新視点をもたらしているように思われる。私なりに近年の新視点を指摘すると次のようになる。⁹⁾

①日本国家という枠組みに収斂させて「日本対西洋」の視点でのみ考察するのではなく、国内の各地域、国家、東アジア、世界といった重層的な捉え方をする。

②「倒幕・佐幕」といった単純な分類で「勝者」中心に語るのではなく、「敗者」や中間的な勢力も分析対象とし、また「闘う民衆」のみならず「闘わない民衆」（平常の営為を続ける民衆）や、女性、身分的周縁なども視野に収めるなど、多様性を重視する。

③「近世近代移行期」という捉え方が出てきたように、近代に至上的な価値を置いて前近代を否定されるべきものとみなすのではなく、近世・近代の連続性と断絶性を考える。

④中間層の力量を評価しつつ、広範で多様な情報ネットワークに注目する。

一九六八年に佐藤栄作内閣のもとで祝われた「明治一〇〇年」は、高度経済成長期の真っ只中にあった日本の近代化達成を賛美するもので、日本武道館に一人人ほど集めて昭和天皇夫妻が臨席した大規模式典も行われた。二〇一八年に安倍晋三内閣が行った「明治一五〇年」キャンペーンでも、各省庁・自治体ではさまざまなイベントが行われたが、国民全体としては盛り上がり方に乏しく、式典も憲政記念館で行われた小規模なもので、天皇（現上皇）は参加しなかった。東日本大震災からの復興を掲げる安倍内閣としては東北地方を敵に回すことはできず、またアジア諸国の反発の可能性も考慮すれば、「明治一〇〇年」のときのような手放しの祝賀はできなかつたと思われるが、前述のような明治維新の捉え方

の変化も背景にあったと考えられる。

私はさらに、「鎖国・開国」言説したいが明治維新や日本近代史の評価に直結することを認識するようにもなり、こうした明治維新に関する新視点を強く意識したうえで研究・教育を進めている。

おわりに

時代・社会の変化により歴史の見方は変化するし、私も影響されてきたと言える。もちろん世間の時流に流されるのではなく、自分自身の見方を確立するよう努めることは必須だが、一方では時代・社会の影響を受けていることも自覚しながら、自身の研究を相対化してみることも必要だろう。やはり研究者も「時代の子」である。

新たな歴史研究の視点にふれながら（木村）

註

- (1) 申維翰（シシモウカン）〔姜在彦訳注〕『回游録』（平凡社東洋文庫、一九七四年）。
- (2) 李進熙『李朝の通信使』講談社、一九七六年、のち一九八七年に『江戸時代の朝鮮通信使』として改訂再刊など。映画に関連して映像文化協会編『江戸時代の朝鮮通信使』（毎日新聞社、一九七九年）も刊行された。
- (3) 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、一九八一年）、三宅英利『近世日朝関係史の研究』（文献出版、一九八六年）など。
- (4) その成果は、木村直也「文久三年対馬藩援助要求運動について―日朝外交貿易体制の矛盾と朝鮮進出論―」（田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、一九八七年）などで発表していった。
- (5) 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、一九八八年）。
- (6) 木村直也「鎖国」の見直しと教科書記述」（『歴史評論』七一―二〇〇九年七月）。
- (7) 「総説・海禁と鎖国」（紙屋敦之・木村直也編『展望日本歴史』四 海禁と鎖国』東京堂出版、二〇〇二年）。
- (8) 木村直也「総論Ⅱ 近世中・後期の国家と対外関係」（曾根勇二・木村直也編『新しい近世史Ⅱ 国家と対外関係』新人物往来社、一九九六年）。
- (9) 木村直也「明治維新と日朝関係」（日韓歴史共同研究シンポジウム報告、一橋大学、二〇一八年八月）。
- (10) 東北地方では「明治（明治維新）一五〇年」という呼び方は避けられていた。二〇一八年には、新潟県立歴史博物館（長岡）・福島県立博物館（会津若松）・仙台市博物館が共同で「戊辰戦争一五〇年展」を開催している。

（本学文学部特任教授）